

差別のない社会へ

横須賀市立武山中学校 三年 高橋 菜央

私は中学一年の秋から中学二年の秋までの一年間、ベルギーの首都ブリュッセルで暮らしていた。EUの中心地であるブリュッセルにはヨーロッパはもちろんアジアやアフリカなどから来た様々な色の肌をした人々が生活している。日本にはほぼ日本人しか暮らしていないが、ブリュッセルの人口に占める移民の割合は約二十%にもなるのだ。このような他国の人々が多く生活している都市での暮らしの中で人権について感じたことを紹介しようと思う。

私は初めての海外生活に不安を抱いていた。というのも、自分が今まで育ってきた所とは言語も文化も違った場所でちゃんとやっていけるかどうか心配だったのだ。しかし、そんな心配もベルギーで暮らし始めてすぐに必要ないものだど悟った。入国して間もない頃だった。ホテルへ向かう途中、重い荷物を持って電車から降りようとしたときに隣にいた若い男の人が私と弟の荷物を電車から降ろしてくれたのだ。その次の日には、スーパーで会計に使うマシーンの

使い方が分からず戸惑っていると近くにいた人達が教えてくれた。

また、通学のため駅にいと、「外国人の子供が一人でいる。」と心配したおじいさんが声を掛けてくれたこともあった。しかも、私がブリュッセルでほとんどの人が使っているフランス語を話せないと知ると、すぐに簡単な英語に切り替えてくれる。そんなたくさんの親切に触れていくうちに、不安だったことが全くの杞憂だったと思えるようになった。

しかし、差別する人もいないわけではなかった。家族と歩いていたら高校生の団体に「YELLOW!」と叫ばれ笑われたり、ファーストフード店で食べ物を英語で注文した際に店員がわざと聞き取れない振りをして何回も聞き返してきたりもした。そんなことをする人はもちろんごく僅かだった。しかし、肌の色が西欧の人と少し違うからといって、そんな差別を受けるのは心外で悲しかった。

でも、自分は何か差別していないのだろうか。よく考えてみると、これは差別や偏見なのでは、と思うことがあることに気づいた。例えば、肌の黒い人をなんとなく怖く感じたこと。また、町にたくさんにいたホームレスや物乞いする人をつい避けてしまったことなどだ。私だけでなく近所に住んでいた日本人も同じようなことを感じてい

たと聞いた。差別するのはよくないと分かっているはずなのにそう思ってしまうのは何故だろうか。

私の通っていた日本人学校の先輩が黒人男性に財布をすられたというのを聞いたことがある。また、お金を恵んでくれと寄ってくる人は中東出身の人が多いように感じた。寒い中わざわざ子供を連れてきて「この子のためにもお金をください。」と紙コップを差し出してくる人、自らの骨のような足を見せて物乞いする人、追いかけてまで物乞いする人、一方的に車の窓拭きをしてお金を稼ぐ人。それらの行為をする人の中に白人は少なく、大抵は黒人や中東出身の人だった。彼らは生きていくためにそうせざるを得ない状況に陥っていて、仕方なくやっているのだろう。けれど、そのような人達を見て、私達の中で黒人や中東出身の人のイメージが悪くなっていく。そうして、差別がまた生まれていくのではないかと思った。

では、どうすれば差別を減らすことができるのか。それには、貧富の差をなくしていくことが必要だと私は思う。今思い返してみると、以前親切にしてくれた人達は白人が多かった。それは、白人が黒人や中東出身の人より裕福な人が多く、他人を思いやる余裕があったからではないだろうか。だから、今仕事につけていない人もち

やんと稼いで暮らしていけるような環境になれば、お互いを思いやるようになり、差別も軽減すると思う。それと、今の私達にできることは、「差別」という考え方をしないよう学んでいくことだ。私達を差別した高校生も店員も若い人達だった。だから、学校などで若者に差別しない心を教育していくことが一番大切なことだと思う。

「相手の立場をよく理解しようと努力する。」簡単な気がするが意外と難しいこの行為ができればきつと差別などなくなるはずだ。身近なところから取り組んでいくだけでもみんなの意識が変わっていけば、それは様々な問題の解決にもつながっていくと思う。

ベルギーでの体験は、差別について考える良いきっかけになった。差別の悲しさ、不快さを実際に感じ、今も続いているこの問題を知ることができたからだ。肌の色が違ってもみんな同じ人間。誰もが平等であるはず。だから、やはり差別はなくしていかなければならないと思う。そのためにも、ベルギーで差別などせず親切にしてくれた人達のように、私も思いやりの心を持ち続けていきたい。